

漢字のうた【師範代養成コース 一段】

1

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは 少し明り
て、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は、夜。月の頃はさらなり。闇もなほ、螢の多く飛び違
ひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行く
もをかし。雨など降るもをかし。

2

秋は、夕暮れ。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、
鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、飛び
急ぐさへあはれなり。まいて雁などの列ねたるが、いと小さ
く見ゆるは いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音な
ど、はた いふべきにあらず。

冬は、つとめて。雪の降りたるは いふべきにもあらず。
霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎ熾
して、炭もて渡るも、いとつきつきし。昼になりて、ぬるく
ゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。

3

ある人、弓射^{ゆみい}ることを習^ウふに、諸^{もろや}矢^やをたばさみて^{まど}的^{てき}に向か
ふ。師^しのい^ワはく、「初^{しよしん}心^{しん}の人^{にん}、二^{ふた}つ^つの矢^やを持^もつことな^なかれ。
のち^{のち}の矢^やを頼^{たの}みて、初^{はつめ}め^めの矢^やにな^なほ^ほざ^ざり^りの心^{しん}あり。毎^{まい}度^どただ
得^{とく}失^{しつ}なく、この一^{いつ}矢^やに定^{さだ}む^むべ^べしと思^おへ^へ」と言^いふ。

わづ^ズかに二^{ふた}つ^つの矢^や、師^しの前^{まへ}にて、一^{いつ}つ^つを^をお^おろ^ろか^かに^にせ^せむ^むと思^お
は^ハむ^むや。懈^け怠^{たい}の心^{しん}、みづ^ズから知^ちら^らず^ずとい^いべ^べども、師^しこ^これ^れを^を知^ち
る。この^{この}い^いまし^しめ、万^{ばん}事^じに^にわ^わた^たる^るべ^べし。

(兼好法師『徒然草』)

初心者が二本の矢を持つてはならない。二本目をあてにして、一本目を^おろ^ろそ^そか^かに^にするからであ
る。怠^{なま}け^け心^{しん}とい^いうのは、自^じ分^{ぶん}で^では^は気^き付^つか^かな^なく^くても、師^し匠^{じやう}は^は見^み抜^ぬいて^{いて}い^いま^ます。

4

祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす

おごれる人も久しからず ただ春の夜の夢のごとし

たけき者も遂には滅びぬ 偏に風の前の塵に同じ

(作者未詳『平家物語』)